

博士論文（要約）

網野善彦の歴史研究の展開

—同時代の歴史論への関与を中心に—

内田 力

本論文は、日本中世史家として知られる網野善彦（生没年 1928～2004 年）の研究活動を分析することで、歴史研究者が自身の専門外の場合での歴史論に新たに参画する意味を考察するものである。

20 世紀をつうじて歴史をめぐる議論（歴史論）が多様化するなか、特徴的な研究活動を展開した研究者として、本論文では網野の存在に注目した。この人物は古文書の読解にもとづく事実解明を自身の主たる研究手法としつつ、新たな歴史の語りを提起しつづけたことで知られる人物である。かれは、『蒙古襲来』（1974 年）や『無縁・公界・楽』（1978 年）などの作品により 1970 年代のうちに「社会史」の代表的な人物として日本史研究者以外にも広く注目された。その後も、多岐にわたる主題に対して多種多様な問題提起をくり広げ、とくに 1990 年代には国民国家論の代表的論者とみなされるようになる。網野の研究活動はいかにして、日本中世史にとどまらず展開していったのか。なぜそのような研究姿勢は形成されたのか。とりわけ、①戦後日本の歴史研究におけるマルクス主義の影響、②1970 年代以降については商業的な出版企画との関わりかた、の二点に留意しながら網野の活動を分析した。

本論文の目的はつぎの二点である。ひとつめは、網野の歴史研究が個性化した過程とその 1980 年代にかけての展開をあきらかにすることである。もうひとつは、1970 年代の無縁論から 1990 年代以降の日本論にいたる、1980 年代をつうじた網野の関心の変遷をたどり、大衆文化の実作者たちにとってはもっとも身近な作品である『異形の王権』（1986 年）の位置づけを明確なものとするすることである。

上記の目的を達成するために、本論文では網野の思索を発表文章に即して把握することを分析方法とした。とくに単行本の著作に拠るのではなく、個々の初出文章を分析した。とりわけ、『網野善彦著作集』別巻（2009 年）の「著作目録」を手がかりにして、多様な商業誌に網野が多くの文章を提供していたことに注目した。

これにくわえて、本論文では分析にあたって、歴史研究をとりまく環境変化とそれに対する網野の思索と活動に注目した。本論文では、『異形の王権』の特徴を考慮した結果、網野にとっての資料・メディア・政治との関わりを論点として抽出して、第Ⅱ部の 3 章～5 章での分析視角に据えた。

本論文は二部五章構成をとった。第Ⅰ部「網野善彦による歴史の再解釈」では、網野が個性的な歴史研究者として注目を集めるにいたった経緯と背景を分析した。1 章「国際共産主義運動からの出発」では、敗戦後の左翼政治運動と網野との関係をあつかった。網野が 1950 年代に日本共産党の運動方針に振り回されたのちに、国際共産主義運動の一環としての政治運動から離脱したことを示した。その後、網野は、その政治運動のなかに内包されていた論点の検証から研究活動を再出発させた。網野の政治運動体験のなかには、視覚メディアへの対応など 1980 年代の状況を先取りする論点がふくまれていたこともあきらかとなった。

2 章「中世認識の転換：停滞から自由へ」では、網野が 1960 年代～70 年代に自身の中世

史認識を転換させた要因を論じた。網野の中世認識の基調が停滞から自由へと転換したことを確認したうえで、その転換の要因を歴史叙述と同時代認識の両面から探った。中世認識の転換にあたっては、歴史上の人物への内面描写、主体的・自発的行動の主題化、学説史・史学史による異議申し立てをつうじて、中世の自由を強調するようになったことを指摘した。このような転換を網野が果たした要因として、商業的な出版企画に接した経験とともに、1968 年を頂点とした学生運動の盛り上がりが大きな影響をあたえたことをあきらかにした。

以上から、共産党分裂期の政治運動がその後につながるさまざまな論点をふくんでいたことにくわえて、網野が 70 年安保前後の政治的状況のなかで学界への批判意識を高めたことで、自身の歴史研究を従来のものと区別するものとして表現したことが判明した。その過程で、日本中世における民衆の自発的行動や自由を強調した中世認識が成立していた。その結果、1980 年ごろまでには中世史の専門家が網野の研究に対して強烈な個性を感じるようになっていた。

第Ⅱ部「1980 年代の網野善彦と同時代の歴史論への関与」では、網野が同時代の歴史論にいかに対応したのかをめぐって、1980 年代の活動を「資料」「メディア」「政治」という三つの観点から分析した。3 章「古文書から資料への概念拡張：モノとの関わり」では、網野が歴史を考える材料として古文書から、遺物や遺跡をふくめた資料へと視野を広げて論じるようになる過程をみた。網野は 1970 年代、名古屋大学文学部史学科に所属していた時期に、他学部の教官とともに「総合資料学研究科」設置を目指していた。その計画は実現しなかったものの、1980 年に神奈川大学に移籍すると自身の資料学を展開するようになり、1993 年に歴史民俗資料学研究科の新設を実現させた。とくに、自身の研究が基本的に文献の分析にもとづくものであると自己規定したことで、自身の専門分野を「文献史学」と表現するようになったことが注目に値する。

4 章「歴史の視覚化の試み：メディアとの関わり」では、網野が非文字資料に視野を広げていたのと同時期に、網野は出版社からの要請に応じて視覚表現を重視した出版企画に関与しつづけていたことをみた。網野は企業 PR 誌を契機として、視覚的に捉えた歴史への関心を抱き、『新版絵巻物による日本常民文化絵引』（1984 年）の校閲作業をとおして知識を蓄積し、それが代表作『異形の王権』（1986 年）に結実した。その後も、画家と協働した絵本『河原にできた中世の町』（1988 年）や分冊百科シリーズ『週刊朝日百科日本の歴史』（1986～88 年）、子どもむけシリーズ『いまは昔むかしは今』（1989～99 年）のような歴史の視覚化のともなう出版企画を手がけた。

5 章「王権と国家の問題視：政治との関わり」では、同時代の右派の活発な活動を目前として、日本の王権を問題視する様子をみた。1970 年代に網野は民衆と天皇の関係を研究していたが、『国史大辞典』の元号方針変更事件と右派の論客である村松剛の著作に接したことで、1980 年代には歴史研究外部での右派的な歴史認識の存在を意識するようになっていた。1989 年の天皇代替わり前後になると網野は中世にかぎらず日本史のなかの天皇につい

て発言を求められるようになっていた。こうした政治的な歴史言説との関係を背景にして網野自身の中世天皇、とりわけ後醍醐天皇の研究は進展していたのである。

以上より、第Ⅰ部の時期が主として歴史研究の内部で自身の研究の個性を確立しようとした時期だったのに対して、1980年代は自身の専門性の外部に見出した問題提起を日本中世史研究に還流させた時期であったと概括できる。自身の学問的根拠の限界を見極めたことで、それまで「歴史学」だと考えていた分野を「文献史学」であると捉え返すようになった(3章)。網野は基本的に出版社からの要望に応えつづけ、そこでの課題を自身の新しい研究に生かしていった(4章)。研究者以外の論敵や覆すべき常識を想定しながら、天皇や日本に関する議論を展開していった(5章)。これらをとおして、網野は時代の変化を自身の研究に吸収した。逆にいえば、専門とする歴史研究に対する示唆がえられるからこそ、網野は自身の専門分野の外にむけた仕事にとりくみつけたといえる。

昭和天皇が亡くなったのち、網野の関心は1990年代になると天皇論から日本論へと比重が移る。歴史上、天皇号と日本の国号がほぼ同時期に登場することに網野は気づいていたので、かれにとってこれは自然な流れであった。かくして網野は、天皇批判の論法を流用するかたちで、「日本」批判を核とする日本論を展開することとなった。網野晩年の代表作である『日本論の視座』(1990年)や『「日本」とは何か』(2000年)はこのような問題関心から執筆された。社会科学において国民国家論が流行するなかで、歴史研究者として応答する議論は貴重なものであった。ただし、天皇にせよ日本にせよ支配者や権力を批判する視点を強めたことで、国家と社会とを対立的に捉えるという議論の単純化が生じていたことも指摘できる。

終章「開拓ゆえの分裂」では、本論文での議論を概括したうえで、網野が1980年代に同時代の歴史論への関与をみせた意味とその背景を考察した。歴史研究のもつ政治的役割の認知と研究体制全体への批判意識が重なった結果、1980年代に網野は同時代の歴史論にたてつづけに関与した。この過程で出版社や編集者は、同時代の歴史論への出会いを斡旋しつつ、網野の歴史研究を方向づけた。網野は、さまざまな出版企画に関わりながら歴史研究の社会的な価値を探究し、積極的に歴史研究のもつ可能性を押し広げていった。しかし、網野の華々しい活躍は分散ゆえの華々しさであり、そこにひとつの矛盾があった。網野の開拓した活動領域の幅広さは、すでにひとりの研究者の背負える量を超えていた。しばしば「社会史」研究の登場によって歴史研究はその研究主題が細分化・分裂したといわれるが、それ以上に、同時代社会への対応という面でひとつの学問分野に収まらない状況になっていた。そのため、伝統的な研究活動のイメージを出発点にして、歴史研究者の活動範囲は属人的に広がっていく。「網野史学」という呼称はそれゆえのものでもあった。1980年代をつうじて、網野をふくめた歴史研究者たちは新たな社会的役割を開拓したが、それゆえにこそ長期的にみれば歴史研究のもつ役割の分裂を早めてしまったことがみてとれる。